

Laplacian

$$\Delta u = \sum_{i=1}^n u_{x_i x_i} \tag{1}$$

Report 1.12

$U$  は連結とする。関数  $u$  は  $U$  上で  $C^2$ -級、 $\overline{U}$  上で  $C^1$ -級であり、次を満たしているとする。

$$\Delta u = 0 \text{ (in } U), \ u = g \text{ (on } \partial U, \ g \geq 0) \tag{2}$$

$g$  が  $\partial U$  上のどこかで正であるなら  $u$  は  $U$  内で常に正であることを示せ。

.....  
 $\overline{U}$  上で  $C^1$ -級であるので、 $u$  は連続である。この為、ある点  $x_0 \in \overline{U}$  が存在し、 $u(x_0)$  は最小となる。つまり、 $u(x_0) \leq u(x)$  ( $\forall x \in \overline{U}$ ) である。

もし、 $x_0 \in \partial U$  であれば、 $u(x_0) = g(x_0) \geq 0$  であり、 $0 \leq u(x_0) \leq u(x)$  となる。

もし、 $x_0 \in U$  であれば、 $u$  は  $U$  で定数関数となる。 $\partial U$  にて  $g \leq 0$  なる点があるので  $u \geq 0$  である。

Report 1.13

$$\tilde{u} = \int_{\mathbb{R}^n} \Phi(x - y) f(y) dy \tag{3}$$

$n = 2$  のとき、 $\tilde{u}$  は有界ではないことを示せ。

.....  
調和関数  $\Phi(x)$  は  $n = 2$  において  $\Phi(x) = -\frac{1}{2\pi} \log |x|$  である。  
 $|x|$  がそれぞれ  $0$  と  $\infty$  に飛ばした場合、 $\Phi(x) \rightarrow \infty$  ( $|x| \rightarrow 0$ ) と  $\Phi(x) \rightarrow -\infty$  ( $|x| \rightarrow \infty$ ) であるので、 $|\Phi(x)| \rightarrow \infty$  である。

$$\tilde{u} = \int_{\mathbb{R}^2} \Phi(x - y) f(y) dy = \int_{\mathbb{R}^2} \Phi(y) f(x - y) dy \tag{4}$$

Report 1.14

$n = 2, \ N = 3$  のとき、次の式を示せ。

$$u(x) - \sum_{k=0}^{N-1} \sum_{|\alpha|=k} \frac{D^\alpha u(x_0)(x - x_0)^\alpha}{\alpha!} = \sum_{|\alpha|=N} \frac{D^\alpha u(x_0 + t(x - x_0))(x - x_0)^\alpha}{\alpha!} \tag{5}$$

.....

---

1. 次の初期値問題の解である関数  $u$  を求めよ。

$$\begin{cases} u_t + b \cdot Du + cu = 0 & \text{in } \mathbb{R}^n \times (0, \infty) \\ u = g & \text{on } \mathbb{R}^n \times \{t = 0\} \end{cases} \quad (6)$$

$c \in \mathbb{R}$  と  $b \in \mathbb{R}^n$  は定数とする。

.....  
式を次のように変形する。

$$u_t + b \cdot Du + cu = 0 \Rightarrow u_t + b \cdot Du = -cu \quad (7)$$

ここから、左辺は  $u$  を微分すると  $u$  の定数倍になることが読み取れる。

$$u = \exp\left(\frac{c}{n+1} \left(t + \sum_{i=1}^n \frac{x_i}{b_i}\right)\right) \quad (8)$$

$$u(x, t) = g(x - tb) \quad (x \in \mathbb{R}^n, t \geq 0) \quad (9)$$

---

2. Laplace 方程式  $\Delta u = 0$  は回転不変である、つまり  $n$  次直交行列  $O$  で変換しても Laplace 方程式を満たすことを示せ。

$$v(x) = u(Ox) \quad (x \in \mathbb{R}^n) \Rightarrow \Delta v = 0 \quad (10)$$

.....  
 $O$  を  $n$  次直交行列とし、 $O = \{o_{ij}\}$  とする。 $O$  は直交行列であるので、 $O$  の転置行列と逆行列が一致する。

$$O^t O = {}^t O O = E, \quad \sum_{i=1}^n o_{ki} o_{li} = \delta_{kl} = \begin{cases} 1 & (k = l) \\ 0 & (k \neq l) \end{cases} \quad (11)$$

$x$  はベクトルであり、その成分を  $x = (x_1, \dots, x_n)$  とし、 $\bar{x} = Ox$  とする。これにより、 $v(x) = u(\bar{x})$  となる。

$x_i$  における偏微分は合成関数の微分より次のように変形できる。

$$\frac{\partial}{\partial x_i} = \sum_{k=1}^n \frac{\partial \bar{x}_k}{\partial x_i} \frac{\partial}{\partial \bar{x}_k} = \sum_{k=1}^n o_{ki} \frac{\partial}{\partial \bar{x}_k} \quad (12)$$

2 階の偏微分は次のように求められる。

$$\frac{\partial^2}{\partial x_i^2} = \left( \sum_{k=1}^n o_{ki} \frac{\partial}{\partial \bar{x}_k} \right) \cdot \left( \sum_{l=1}^n o_{li} \frac{\partial}{\partial \bar{x}_l} \right) = \sum_{k,l=1}^n o_{ki} o_{li} \frac{\partial^2}{\partial \bar{x}_k \partial \bar{x}_l} \quad (13)$$

これらを用いて  $\Delta v$  を計算する。

$$\Delta v = \Delta u(\bar{x}) = \sum_{i=1}^n \frac{\partial^2}{\partial x_i^2} u(\bar{x}) = \sum_{i=1}^n \sum_{k,l=1}^n o_{ki} o_{li} \frac{\partial^2}{\partial \bar{x}_k \partial \bar{x}_l} u(\bar{x}) \quad (14)$$

$$= \sum_{k,l=1}^n \left( \sum_{i=1}^n o_{ki} o_{li} \right) \frac{\partial^2}{\partial \bar{x}_k \partial \bar{x}_l} u(\bar{x}) = \sum_{k,l=1}^n \delta_{kl} \frac{\partial^2}{\partial \bar{x}_k \partial \bar{x}_l} u(\bar{x}) \quad (15)$$

$$= \sum_{k=1}^n \frac{\partial^2}{\partial \bar{x}_k^2} u(\bar{x}) = \Delta u \quad (16)$$

よって、 $\Delta u = 0$  であれば、 $\Delta v = 0$  である。

3. 平均値定理の証明を利用し、 $n \geq 3$  の時、次の式を証明せよ。

$$u(0) = \frac{1}{n\alpha(n)r^{n-1}} \int_{\partial B(0,r)} g dS + \frac{1}{n(n-2)\alpha(n)} \int_{B(0,r)} \left( \frac{1}{|x|^{n-2}} - \frac{1}{r^{n-2}} \right) f dx \quad (17)$$

$$\begin{cases} -\Delta u = f & \text{in } B^0(0,r) \\ u = g & \text{on } \partial B^0(0,r) \end{cases} \quad (18)$$

.....

4. 関数  $u \in C^2(U) \cap C(\bar{U})$  が開集合  $U$  の境界上を除いて調和的である時、次が成り立つことを示せ。

$$\max_{\bar{U}} u = \max_{\partial U} u \quad (19)$$

HINT :  $\varepsilon > 0$  の時  $u_\varepsilon = u + \varepsilon|x|^2$  とおくと、 $U$  の内部では最大値を取らないことを示せばよい。

.....

5. 次のような  $v \in C^2(\bar{U})$  を 劣調和関数 (subharmonic) という。

$$-\Delta v \leq 0 \quad \text{in } U \quad (20)$$

(a)  $v$  が次を満たすことを示せ。

$$v(x) \leq \frac{1}{\alpha(n)r^n} \int_{B(x,r)} v dy \quad \text{for all } B(x,r) \subset U \quad (21)$$

.....

(b) 次を示せ。

$$\max_{\overline{U}} u = \max_{\partial U} u \quad (22)$$

.....

(c)  $\phi : \mathbb{R} \rightarrow \mathbb{R}$  はなめらかな凸関数とする。

$u$  は調和関数、 $v = \phi(u)$  とした時、 $v$  は劣調和関数であることを示せ。

.....

(d)  $u$  が調和的である時、 $v = |Du|^2$  は劣調和的であることを示せ。

.....

6. 開集合  $U \subset \mathbb{R}^n$  は有界であるとする。

この時、 $U$  のみに依存した定数  $C$  が存在し、次の式が成り立つことを示せ。

$$\max_{\overline{U}} |u| \leq C \left( \max_{\partial U} |g| + \max_{\overline{U}} |f| \right) \quad (23)$$

なお、 $u$  は滑らかな関数で、次の解である。

$$\begin{cases} -\Delta u = f & \text{in } U \\ u = g & \text{on } \partial U \end{cases} \quad (24)$$

HINT :  $\lambda = \max_{\overline{U}} |f|$  に対して、 $-\Delta \left( u + \frac{|x|^2}{2n} \lambda \right) \leq 0$

.....